

左室駆出率低下の心不全には年齢や性別を問わずβ遮断薬が有効

左室駆出率低下の心不全に対するβ遮断薬の服薬状況について、高齢や女性の患者では、効果が実証されている用量よりも少ない量が服用されていることがある。本研究では、左室駆出率低下の心不全患者へのβ遮断薬の有効性および忍容性と、年齢および性別との関連について検討した。

試験開始時に正常洞調律を保ち、左室駆出分画が0.45未満の心不全患者（40～85歳）を対象としたプラセボ対照ランダム化試験11件、総被験者数13,833例（中央値64歳、女性24%）についてメタ解析を行った。その結果、β遮断薬服用群はプラセボ群に比べて、全年齢層において死亡率が低下した。すなわち、年齢で区切った第1四分位群（年齢中央値50歳）では、β遮断薬群のプラセボ群に対する死亡のハザード比は0.66、第2四分位群（同60歳）では0.71、第3四分位群（同68歳）では0.65、第4四分位群（同75歳）では0.77であった。年齢を連続変数とした場合には、β遮断薬による死亡リスクの減少効果との有意な相関はみられなかった（ $p=0.10$ ）。心不全による入院のリスクについても、β遮断薬により有意に低下したが、その効果は年齢が高くなるにつれて減弱した（相互作用の $p=0.05$ ）。一方、性別によるβ遮断薬の効果は、どの年齢層においても認められなかった。服薬中止率は、実薬であってもプラセボであっても（14.4%対15.6%）、年齢や性別にかかわらず同程度であった。

したがって、左室駆出率低下の心不全患者の死亡リスクや入院リスクを低下させるためには、年齢や性別にかかわらずβ遮断薬が服薬されるべきであることが示された。

出典：British Medical Journal. 2016; 353: i1855